

●出遅れる企画主

「スタジオがわかりにくい場所にあるので、迷つたら電話してくださいね」と伝えておいた鉄巻と一ます先生からの電話を華麗にスルーした十一月。

一分後に折り返し、「いまどちらに!?」と聞いたら「スタジオに来たけど誰もいない」と言われたのが、収録の始まりだった。

収録開始の三十分前に現地に入れば余裕だろうとタカをくくっており、最寄りのコンビニで差し入れジュースなどを買っていたせいですっかり出遅れてしまった。

急いでスタジオに駆け込む虎走。

エレベーターを降りるとカンバンが、あり、そこに案件名が書いてある。

ちなみになんて書いてあつたかは全く覚えていない。

たぶん「ダミーへッドマイク収録」とかそんな感じの記載だつた気がする。

このスタジオには、収録ブースが二つある。

AルームとBルームという感じになつていて、Bルームの方が広い。

我々が使うのはBルームの方だ。

スタジオには待合室的な空間もあり、私が駆けこむと、と一ます先生がすでに何者かと談笑している。

この若々しくて爽やかでめちゃくちや声のいい青年こそ、サルーキを演じてくれる観世智顕さんである。

賢プロさんのホームページで写真を拝見したイメージしかなかつたので「金髪の青年なんだろうな」と思つていただけれど、茶髪になつていたので一瞬「と一ます先生、別の案件の人と急に仲良くなつてんの? コミュ力半端なくない?」と戦慄した。
普通にうちの案件の人だつた。

漫画家さん、声優さんより後にスタジオ入りしてしまつて冷や冷やの滑り出しである。

●続々と集まるメンバー

と一ます先生に作画資料としてスタジオの写真などを撮つていただいている間に、音響監督が到着する。

そしてなぜか賢プロのマネージャーさんがやつてくる。

同人の現場にまでわざわざ顔を出してくれるとは……忙しいだろうに頭が下がるばかりである。

マネージャーさんと名刺交換などをしていると、廊下の方が一瞬ざわつとなる。

明らかに分かる「何者かがやつてきた」感。

そう——本日の主役、小野友樹さんがいらっしゃったのである！

ところで、収録には演者さんが入る収録ブースと、スタッフが入るコントロールブースがある。

演者さんは基本的に収録ブースに直行し、荷物を置き、収録中もマイクを通して音響監督とやり取りをするので、コントロールブースに顔を見せることはあまりない。

せいぜい挨拶くらい？かな？

なので、頃合いを見計らい、音響監督が収録ブースに出向き、役の説明やら直前の修正点やらをお伝えする。

企画主もその音響監督について行つて、軽く「挨拶をさせていただく。

当案件の企画主（私のことだ）は基本的に人見知りで、雑談やら役の説明やら挨拶やらがめちゃくちゃ苦手なのだけど、小野さんがとんでもなくフレンドリーないい方だったのでもほとんどノーダメージでこのミッションをクリアすることができた。

常に笑顔。マジで常に笑顔。

明らかに慈愛の神の加護を受けている。

そしていよいよ収録が始まるのである！

●キャラ感の調整

ところで「キャラ感」というのは難しい。

この企画は鉄巻とーます先生のイラストから始まつたけれど、そのキャラをもとに私が脚本を書いた結果、すでにとーます先生の抱く「キャラ感」と私の抱く「キャラ感」には超えられない壁が存在する。

一応とーます先生に「キャラ感どんなんじ？」と聞いたら「もう台詞の時点で僕の想定してたキャラとは違うわい」と言われて「デスヨネ」となつたので、私の思うキャラ感で進めていくことにした。

ファイブは人並み外れてマツチヨな、ゴリゴリの戦闘職だ。

おそらくキャラデザを見て想起される声は、太くて重い、重厚感のある荒々しい声だと思

う。

でも私はそういうキャラを書かなかつた。

穏やかで、優しさと甘さがあつて、適度に低くて心地よい。
でも怒つてるとときは迫力があるとよい。

そういう声を想定して台詞を書いた。

本格的に収録が始まる前段階として、声優さんにテストでいくつか台詞を読んでもらう。その声を基準に「もっとこんなふうにしてほしい」とお伝えし、キャラクターの声ができる。

テストで小野さんが読んでくれた台詞は、重厚で強そうで、軍人然としており、正直「…んな低い声出るの!?」と驚いた。

キャラデザ的にはこの声でベストだった気がするけれど、作品のコンセプトも合わせて「もう少し穏やかで優しい声音をお願いします」とキャラ感を調整してもらつた。

そして調整一回でバツチリとはめてくる小野友樹さん。あまりにも天才が過ぎる。踏んできた場数が違う。

キャラ感の調整が終わると、いよいよトラックごとに台詞を録音していく。

●耳元で聞こえるイケボ

当たり前だろと言えば当たり前のだけど、ダミヘ収録の時はコントロールブースにいる人間も全員ヘッドホンを装着する。

ダミーへッドマイクは「自分がその場にいるかのような」音が収録できるマイクだ。

ヘッドホンやイヤホンを装着して音を聞くと、目の前や隣や背後にキャラクターが立つて喋っているような感覚を味わえる。

そのため、音の距離感や立ち位置を確認するために、収録するときからヘッドホンを通して聞いた音を確認する必要があるので、お分かりいただけるだろうか。

企画主は今回、女性向けにこの脚本を書き、「ディープキス」やら「耳舐め」のシーンを盛り込んだ。

コントロールブースにいるスタッフは全員真面目な顔をして音声のチェックをしているが、全員小野友樹さんによるディープキス音と耳舐めリップ音をめちゃくちや耳元で聞いているのである！

しかもトラックごとに、音響監督が「どうでしたか?」と感想を求めてくる。

どうもこうもないわ耳がくすぐったいわ！ などと叫んで逃げ出すわけにもいかないのと、真面目に「この単語のイントネーションって今のであってました?」とか「…この台詞ちょっとと言い間違つてます」とかいう修正をお願いする。

ついでに自分の収録の時間まで見学中の観世さんに「どうでした!？」と意見を聞いてみる。

声優さんにしかわからない何かがあるかもしれないから、せつかくなので聞いておこうと思つただけで、決して困らせる意図があつたわけではないことをここに言い訳として添えておきたい。

●ベテラン過ぎて収録が1時間以上まく

「以上になります。ありがとうございましたー」

という音響監督の合図で、小野友樹さんパートの収録が終わりとなる。

1時間ちょっととの作品なので、リティイクしつつ説明しつつ、大体四時間くらいかかるのが普通らしいのだけど、二時間半くらいでさくっと終わってしまった。

つまりほぼほぼノーリテイク。

今回はたまたま観世さんが頭から見学に入っていたので、タイムロスゼロで観世さんの収録を始める事ができた。

観世さんはダミへ収録初挑戦だ。

一度ヘッドホンを装着した状態でしゃべつてもらい、「自分の声がどう聞こえるか」を確認していただく。

ところで今回、小野さんにはテキストインタビューとサイン色紙をお願いしてあつた。色紙をさつと書き上げたあと、「記憶が新鮮なうちに」と待合室でテキストインタビューをぱちぱちスマホに入力してくださつていたのだが――。

観世さんの音声チェックが終わり、収録を始めるぞと言うところで、すつと小野さんがコントロールブースに入つてきた。

「サルーキの見学させてもらいますね！」

そして観世さんの収録が始まるのである。

●ほんとに君は初めてなのか？

ダミへ収録が初めてという観世さん。

正直波乱万丈な収録になることを覚悟していたのだけれど、結論だけ先に行つてしまえばまるで難航しなかつた。

小野さん演じるファイブと同じく、こちらもキャラ感の調整から入る。

2～3回調整しただけでよい感じになる。
マイクの距離感とかも全然違和感がない。

違和感がないどころか、めちゃくちゃ上手い。

なんだこれは……どうなつてるんだこの色気は……。

脚本を読めばお分かりの通りだけれども、サルーキはヒロインに対してもうと怖いセリフを言うシーンがある。

まったく色っぽいシーンじやないのに「悪役がヒロインに迫る色気」がすごい。

作家としての語彙力が消失するレベル。

動搖してるのは私だけかとおもつたら、とーます先生も「今のめちゃくちゃエロくなかった？」となつていたので満場一致でえつち。

虎走かけるは健全作品にひそむ色気が大好きなので観世さんに千点加点です！

●別日収録の丸中さん

ところでこの作品、最初は小野友樹さん一人の出演を予定していた。

けれど「もう一人くらいいた方が会話の幅が広がつてよいな」と思つて観世さんに参加していただいた。

ついでに観世さんにモブをやつてもらう予定だつたけれど、音響監督判断によつて「父親にも声あつた方がいいし、電話モブも観世さんじやない方がいいです」という事になり、賢プロダクションの丸中さんにヒロインの父と電話音声をやつしていただくことになつた。これが決まつたのは小野さん＆観世さんの収録が終わつた後。

なので一度フィックス原稿を書きなおした。

とはいえる「まあ、台詞2個くらい書き足すだけでいいかあ」と思つていたのだけれど、丸中さんがツイッターで「初めてのシチュボ参加です！」と宣伝してくれているのを見た私の胸中に「台詞三つじや忍びないな……」という気持ちが発生し、もう一回フィックス原稿を書きなおす事となる。

実はもともと「もーちよい親父の台詞あつた方がいいかなあ」と思つていたのだけれど、でも小野さんの台詞が始まる前にあんまりサブキャラの台詞が続いてもなあ……という葛藤もありで悩んでいたところだつた。

そして台詞を足した結果がどうだつたかと言ふと、なんということでしょう、想定以上にバツチリだつたのである。

普段は洋画の吹き替え仕事が多いと言う丸中さん。なるほどめちゃくちや声が渋い。そして実に悪役っぽい。「マフィアのボスっぽい声の人お願いします」といつて丸中さんが来たら誰も文句言わないと思う。

●あとは効果音を付けるだけ

ボイスの収録が終わったら、次はこれに効果音を付ける作業が待っている。

プロの音響効果さんが、足音や衣擦れやドアの開閉の音などをつけてくれると、ボイスドラマの完成だ。

ちなみにこの収録レポを書いている段階では、まだ効果音がどんな感じになつていて企画主も分かつていない。

でもきっとめっちゃいい感じになつてていると思う。

この作品が少しでも皆さんの心をドキドキさせられることを祈つていてる。